こどもの時間～取り戻せないもの～

櫂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こどもの時間～取り戻せないもの～

【Ｎコード】
Ｎ１９４１Ｔ

【作者名】
櫂

【あらすじ】
俺の母親は『女』だけれど『母親』じゃない。
父親が違う兄妹が生きるために取った行動とは？

第一話

やってられっかよ。

朝起きたらキッチンのテーブルの上に一枚のお札と殴り書きにされたメモが置いてあった。

『しばらく留守にします』

誰あてだとか誰からだとか、そういうことすら書いていない、ただ最低必要な言葉だけが書かれたメモ。家をどれだけ開けるのか、これで掴みとれってか？

「にーちゃ。　ママは？」

毛布を引きずりながら寝ぼけ眼で起きてきた小学1年生になったばかりの妹が、珍しく三日家にいた母親を求めて尋ねてきた。

「あ……あ。　おはよう、くるみ」

「おはよう、にーちゃ。　……ママは？」

「ママは仕事に行ったから、またしばらくにーちゃと二人だけど、我慢できるよな？」

あの女がいなくなる時に必ず使う言い訳にうんざりしながらも、まだ幼い妹には有効だろうから使うことにしている。

『仕事』という言葉は本当に便利だ。

仕事半分遊び半分でも家に帰ってこずに通してすれば、それは『仕事』で出かけていることになるからな。

まああの女の場合は、仕事１０％、遊び９０％なのは百も承知だ。

小学校低学年の時から家事は全部おれの仕事だし、くるみが産まれてからは育児も俺の仕事になった。
くるみは俺がほとんど育てたようなもんだ。
それなのにくるみは母親を慕っている。
それも当然。俺はあの女を『母親』としてちゃんとくるみに植え付けたからな。そうしないと俺のようにひねくれて育つとひねくれた俺が考えたからだ。

「ママ、たいへんだね。おしごとだもん、くるみがんばれる」
「……そうだな。またにーちゃと頑張ろうな」
「うん！」

「じゃあ着替えたらご飯にしようか」と、いつものごとく朝の支度を済まさせる。
柔らかく長いくるみの髪を櫛でやさしく梳いてやると、くるみが今気に行っている髪型に結えてやった。俺も上手に髪を結えるようになったなあと、なぜか感慨深く思ってみたり。
ご飯といっても茹で卵とトースト、牛乳と、至極簡単なもので何時も済ませている。
俺だって中学校に行く用意があるから、朝はこの程度の支度しかできない。他の奴に聞いたことがあるが、親がいても朝飯抜きなんてザラだそうだ。くるみがいる限り、俺にその選択はないがな。

くるみを小学校に登校させると、そのまま自分も中学校へ向かう。
ちょっと曇ってきた空を見上げて、干したばかりの洗濯物を心配する中学生っていうのは俺くらいだろうな、なんて思ってみたが、あの女がいない分だけ洗濯物の量が減って少しは楽になるか？なんて考えてもみた。
おれって主夫くせえな。

「よっ！　相変わらず朝早いな！」
「おす。　お前も人のことが言えんがな」
肩をぽんと叩かれて振り向けば、同じクラスの島元（しまもと）　歩夢（あゆむ）がにかっと笑って立っていた。
こいつとは小学校のころからの腐れ縁だから、俺んところの内情ってやつを知っている。
「こんなに早いってことは、さてはくるみちゃんを送っていったな？」
「……悪いかよ」
「いや？　過保護なにーちゃだなって思っただけさ」
「仕方がないさ。今朝いなくなったしな」
「……そうか。そうだな。そりゃあ心配になるわ」
「おう」
こいつにだけは本心を明かせることができるので、男らしくはないとは思うが愚痴もでるっていうもんだ。
「ところでさ。お前の後を付けているおっさんがいるんだけど？」
急に寄ってきて何を言うかと思えば、俺をつけてるおっさん？？
俺ってそんなに有名人か？と突っ込みそうになったが、バカらしくてやめた。
「いや、マジで。……ちょっと斜め後ろの角、見てみろよ」
そう言われたので何気なさを装って後ろを振り返ると、さっと角を隠れた人影があった。

「見えたか？」
「いや、見えねえけど。でも、誰か隠れたような気がする」
「そうか。そいつさ、最近よくこのあたりで見かけるんだよ。中学生の男子が目当てっぽいから、お前も気をつけろよ。お前へんにモテるからなあ」
「きもっ！何言うんじゃお前は一体！口に出すことすらきもいわっ！！」
「いや？マジ話なんですけれどね？お前昔っから男にもてるからなあ。お前が女ならお嫁さんにしたいって言われたことあるだろ？」

がこんっ！

「痛った！……殴ることねーだろうよ！」
「阿呆か！お前、自分が同じこと言われたらどうするよ？」
「は？そいつ殴るに決まってんじゃん」
「はい、そうさせていただきましたとも！」

まだぶつくさ言っている歩夢を置いていくようにさっさと歩きだした俺に「おい待てよ！」と数テンポ遅れて走り出した歩夢は、それでも件（くだん）のヘンタイを気にしてか何度か後ろを振り返っていた。

＊

「にーちゃ。おなかすいた」
「そうだな。今日はなんにする？カレーがいいか？それともシチューか？」

あの女がでていってすでに3週間。

冷蔵庫にある食料はもう底をついた。
あの女が置いていった1万円も水道光熱費の支払いでほとんど持っていかれて、1週間の食費にもならなかった。
アパートの家賃を支払えと、再三の請求も大家が直接来てしていった。
小学校と中学校からは給食費未払いの知らせをもらい、それも払うことがどうしてもできない。
中学校なら牛乳配達か新聞配達ならバイトできるということだが、6歳の妹一人をアパートに残してバイトに行けるわけがない。

稼ぐことができない。
お金がない。
食料もない。

手元に残っているのは、屋根と布団と……そして可愛い妹だけだ。
こんなとき、あの女が帰ってくることだけが望みになる。
それが……それが俺には悔しかった。
俺はどうしようもない子供で、たった一人の妹に満足にご飯を食べさせることもできなくて。
一生懸命頑張っても、どんなに努力しても中学生ができることは限られていて。
結局はあの女に頼ることで生きながらえなければならない。
それも、何時帰ってくるかもわからないのに。

何もない冷蔵庫を除きながら、くるみには見せれない涙が頬をつたっていった。

「ちょっと待ってろ。にーちゃがご飯買ってくるから」

本当はもうお金なんて1円も持っていない。

俺一人なら、泥棒でもなんでもして生きてやる。
でもくるみがいるから、そんなことは決してできないし、しない。
くるみがいるから、俺は品行方正に生きてくるみの恥になるような兄にはならないようにする。
そう思って生きているのに。

世の中そんなに甘くない。
お金がすべてなんだ。
生きるすべはそこなんだ。

気がついたら歩夢の家の前に立っていた。
せめてくるみだけには何か食べ物を貰おうと玄関に立ってチャイムを押そうと思ったら、家の中から楽しそうな声が聞こえてきた。
俺には縁のない家族の団らん、ってやつだ。

そうか。俺はくるみに団らんを与えてやれることはないんだ。
俺がどんなに頑張っても『家族』というものをくるみに与えてやれることはできないんだ。

俺はそのままおなかをすかして待っているくるみの待つ家に帰った。
家に帰るとくるみは待ち疲れたのかそれとも腹が減っているのを慰めるためなのか、すでに眠りこけていた。
よかった。
これから俺がすることは、くるみにとって酷いことなんだろう。
でも俺は、俺にとって最大の愛情の表現なんだ。
寝ているくるみの顔をみて、俺は自分がすることが正しいと、間違っていないことを願った。
そしてくるみをおんぶして、今帰ってきたばかりの家を後にした。

第二話

ピンポーン

「はーい。あら？義人くん。どうしたの、こんな時間に」

「歩夢～。義人くんよ～？」と家の中に声を書ける歩夢のお母さんに「いえ、おばさんにお願いが」といって頭を下げようとしたら、背中におぶさっているくるみを見ておばさんが驚いて家の中に招き入れてくれた。

「くるみちゃん……、頬がこけてるわ。……義人くんも」

その掠れた声に泣きそうになりながら、俺はうんうんと頷くしかなかった。

「おばさん。お願いがあるんです。こんなことはおばさんに頼むのはおかしいってわかっています。でも俺、歩夢しか頼るやつがいなくて……。おばさんしか思いつかなくて」

「まあまあ、おぶさっていると大変でしょ？ほら、家におあがりなさい。くるみちゃん寝ちゃってるし、ちょっと布団を取ってくるから。歩夢、義人くんとくるみちゃんをお願いね」

「義人、ほらこっちこいよ」

歩夢のつらそうな顔なんて見たくなかった。

自分があの女に負けたということを見せたくなかった。

でも俺はくるみのためにできることをしなければいけない。

「悪い、歩夢」

「なーにいってんだか。お前、もっと正直になれ」

おばさんが居間の横の和室に布団を引いたからと、俺に声をかけてくれた。

ありがたかった。

くるみは小学1年生にしては本当に軽くて背負っていることが重くはなかったんだが、それでも背負い続けるのは俺の決心がくじいてしまいそうだった。

「義人くん。いつから？」

おばさんにはお見通しだったらしい。

「……学校に行っている間は給食があるから、それで。でも、くるみにはちゃんとできるだけ食べさせました」

「大丈夫よ。おばさんは攻めてるんじゃないから。ただご飯を食べてないのなら少し軽めのものじゃないと胃が痛くなるからその確認、ね」

気遣わしげに笑うおばさんを申し訳なく思いながらそれでも、俺はいまからとんでもないことを言わなければならない。

「おばさん」

「なに？」

「くるみを……くるみをお願いできませんか？」

「義人！？おまっ……！」

何か言おうとした歩夢をおばさんが引きとめて、真正面から俺を見て言った。

「それで？義人くんはどうするの？」

俺？俺のことなんてどうでもいい。

今大切なのはくるみのことだけ。

「……くるみちゃんが大切なのはよくわかる。歩夢もよく話してくれるしね。でも、じゃああなたはどうするの？どうやってこれから生活するの？」

「そ……それは……」

「やっぱり考えてなかったわね？」

おばさんは大きくため息をついて、それでも俺におかゆを進めながら話しだした。

「あのね？　児童相談所って知ってる？」

おばさんの問いに首を傾げた俺をみて「それって学校で問題を起こした奴がいくところだろ？」と歩夢が助け船をだしてくれたが、それは外れだったらしい。

「違うわよ。たしかにそうとも言えるけど、それだけじゃないの。でもその前に警察に相談したほうがいいわね」

「「警察？！」」

「俺っ！俺何も悪いことなんてしていません！」

どんなに腹が減っても、どんなに苦しくても、誓って万引きとかしなかった。

自分のためにじゃなくて、くるみの将来のために。

「そうじゃないわよ。警察に相談っていったでしょ？義人くんの

家の事情を義人くんが警察の人に言うの。そうしたら保護してくれるから」
「「保護？」」
「そう。保護。そうしたらとりあえず寝るところと食べることはできるからね」
「……この家にはやっぱりくるみは置いてもらえないんですよね」
歩夢の家で、本当の家族の団らんをもらえる家で、くるみが育つことができないんだ。
「そうなるわね」
「母さん！」
それじゃああんまりだと叫ぶ歩夢に優しそうなおばさんはぴしゃりと言い返した。
「じゃあ歩夢は義人くんとくるみちゃんが離れ離れになっていいの？よくないでしょ？」
「……にーちゃ。ここどこ？」
俺たちの大きな声を聞きつけて、寝ていたくるみが起き出した。
「ここは歩夢ん家だよ。……おかゆ、貰ったから食べよう」
「おかゆ？うん。食べる！」
「ちょっとまって。それは義人くんのだから。くるみちゃんには新しくよそうからね」
「ありがとうございます。いただきます」
俺の横に座って、礼儀よくお礼を言えたくるみを見て、おばさんはちょっと目がしらを押さえていた。

「はい。よろしゅうおあがり」

そういって出されたおかゆとちょっとぬるめのお茶をゆっくりといただいて「ごちそうさまでした」と言うころにはくるみはまた眠気がきたようでうつらうつらとしていた。

お腹がいっぱいになって眠たくなったのかな。

おばさんはくるみにうがいだけをさせて、また布団まで連れて行ってくるみが寝つくまでそこにいてくれた。

母親っていうのは、歩夢のおばさんのように愛情をそそいでくれるもんじゃないのか？

どうして俺たちの親はあんなに自分だけしか見ずに俺たちを見捨てていくのだろうか。

知らない間に流れていた涙が落ちて、俺の手を濡らしていく。

俺だって、あの優しい手のぬくもりがどんなに欲しかったか。

俺だって、友達たちのように夕暮れまで公園で遊んで、家に帰ると母親にお帰りって言ってもらいたかった。

でも現実は、母親は俺に触れることはなく、自分がしたくない家事を全部俺に押しつけて自分はペディキュアだかマニキュアだか手入れすることに余念がなかった。

俺の父親とくるみの父親はだれか全く分からない、そんな女だった。

「くそっ……くそっくそっ！くそっっ！」

椅子の背もたれを拳で殴りつけていると、歩夢がびっくりして俺を抑えた。

「義人！義人、いいから！もういいんだよ。抱えんな」
「くそおぅっっっ！！！」

俺は何もできない。
俺は何もできない。
俺は何もできないんだ！

くやしくてくやしくてくやしくて。
歩夢が俺を抑えてくれている間ずっと泣き続けいていた。

第三話

「母さん。義人、寝たわ」
「そう。張りつめていたから、それもいいと思うわ」
「張りつめる……？」
「あのね。じゃあ歩夢は義人君のようにご飯作ったり洗濯したり小さい子の世話を毎日できる？」
「……わからない」

ふう、と母が大きくため息をついた。
本当は、俺には義人のようになんて絶対できない。
小さいころから、俺の記憶があるころから義人とは夕方一緒に遊んだことがない。
それどころか俺や友達が遊ぶ公園の横を、くるみちゃんを背負って買い物に行く義人をずっと見て、なんであんなことをしなくちゃいけないのかと母に疑問をぶつけたことも何度かあるくらいだ。

第四話

子供ってのはずるい生きものだ。

都合が悪い時は『子供』で、都合のいい時は『大人』になるものなんだよな。

だいたい一人っ子の俺としては、基本親の前で『大人』になる必要はない。『子供』でいたほうがなにかと都合がいい。小遣いをもらえるのも、なにかの記念日だといって欲しいものをプレゼントしてもらえるのも子どもだからであって、大人がそれするとただの図体のでっかい馬鹿ってことだろ？

けれど、義人は違った。

あいつは本当に小さいころから大人だった。

小学校のころ、義人の服がいつも古ぼけていて汚くて臭かったのを馬鹿にしたように言った奴がいた。「おまえ、くっせぇ。臭わんのか？くっせぇくっせぇ」鼻をつまみながら近寄ってくんなとばかりに義人から逃げようとしたそいつを、義人は「じゃあきくけど。おまえはどうやったら臭くない服が手に入るんだ？」と真顔で尋ね、そいつを黙らせたことがある。小学一年生の時ですでにこれだ。

義人曰く、「わからんから聞いただけ。でも結局そいつも知らないんだから偉そうに言うなってんだよな。洗濯っていうのをこのときの担任に教えてもらったから、あれ以降は服もそこそこ綺麗だっただろ」だそうだ。

給食は義人の一日のご飯の一番のごちそうだった。

朝は食パンがあればいいほうで、本当はほとんど何もない。夜は

夜で母親が遊び歩いているからご飯の支度などしてくれない。自分の分だけコンビニで弁当を買ってきて食べ残しを義人の渡すような親だったそうだ。だから、下手したら晩御飯がない時もあの当時はザラだったそうだ。

仕方がないから、義人は防衛にでた。

学校の給食のパンをおかわりするふりをして、そのままランドセルに入れ込んで持って帰ることにしたのだ。

ある時、担任が義人の朝の行動がキレやすいのはどうしてだと義人に聞いたことがあったそうだ。その時正直に「お腹が減ってイライラするからだ」と答えたそうだが担任は朝ご飯をちゃんと食べてきなさいといったのだそうだ。……出してくれる親だったらイライラなんてしてないってゆーの。でも担任が義人の親に「朝ご飯を食べさせてください」と言ったら義人の親が言った言葉が今でも耳に残ってる。

「うちは朝ご飯は食べない主義なんです！」

そんな主義、いらねー。

なんて酷い親だ。そのときは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1941t/

こどもの時間～取り戻せないもの～

2011年10月9日03時05分発行